2020 年 11 月 21 日

地中海学会トーキング　西洋文化の玄関口となった横浜をきっかけに生まれた国内諸文化の概観

「古典主義建築の意匠と横浜の近代建築への応用」

横浜国立大学　菅野裕子

１．はじめに

古典主義建築というのは、古代ギリシア、古代ローマのデザインを起源とし、ルネサンス、新古典主義を経て、ヨーロッパを超えた広い地域で建てられました。アジアの日本にも 19 世紀以降に入ってきて、グローバルに広がっているといえます。

こちらを見ていただくと、世界中に同じようなスタイルが広がっているのがよくおわかりいただけると思います。一見するだけでは、どこの国のものか区別がつかないように見えます。建築の古典主義ではルネサンス時代に理論書が出版され、中でもパラーディオやセルリオといった著者は有名ですが、それらの出版物によってデザインの標準化が進んだので、比較的、どこの地でも標準的なデザインが作りやすいスタイルといっていいかもしれません。

とはいえ、グローバルに広がった古典主義建築でも、やはりローカル性とか、個性というのは、さまざまな形で読み取れるだろうと思います。では、それは実際にはどのように見いだせるのだろうか。ということを考えながら、横浜の近代建築を見ていきたいと思います。

こちらにお見せしているのが、横浜に建てられた古典主義建築の例です。横浜には多くの西洋様式の建物が建てられましたが、残念ながら関東大震災と戦災で大多数を失い、古典主義様式でいうと、現在残っているのはこちらの 8 つの建物になり、その中から、今日は二つを扱います。

一つが、明治 37 年の横浜正金銀行本店で、もう一つが、1931 年、昭和 6 年の英国領事館です。この二つを選んだ狙いというのは、これらにいくつか対照的な点があるからで、まず、設計者は、横浜正金銀行は、最初期の代表的な日本人建築家、妻木頼黄の設計により、彼は日本と、アメリカとドイツで建築を学んだ人ですが、一方、英国領事館の方は、日本人ではなく英国工務省です。また、場所は、横浜正金銀行は、現在の馬車道駅のそばで、もともと日本人町だったところで、一方、英国領事館は、現在の日本大通りの駅の近くですが、この場所とは、かつてこちらの絵にあるような、ペリーが上陸した図に書かれている場所になります。ここから、ひとつひとつの建物の話に進みます。

２．横浜正金銀行本店（神奈川県立歴史博物館）

まず、横浜正金銀行の外観において、古典主義のデザインとしてみたときの要点についてご説明しします。この建築の外観には、主要なデザイン要素としては、ドーム、ペディメント、コリント式オーダーがあり、これらはどれも、古典主義の代表的なデザインモチーフと言え、一見していかにも古典主義建築と

思える形をしています。この中で、やや特殊と思われるのは、ペディメントが 2 階の窓にも見られ、神殿モチーフが入れ子のような関係になっていることで、これは、明治 29 年の辰野金吾の日銀や、辰野が参照したというベルギー国立銀行との共通点でもあります。

また、興味深いのは、正面と側面とで、一見同じようなペディメントを持つ形が見られますが、この二つを比較すると、正面に対して側面は少しずつ細部が変化されたバリエーションになっています。今日は時間の関係で、詳しくはご説明できないですが、古典主義のデザインの規則というのは、しばしば言語の文法や語彙にも喩えられるものです。正面と側面の 2 面を比較すると、ここでの変化とは、その文法や語彙をよく理解した上での操作であることがわかり、この様式をよく学んだ成果のように見えるものです。

また、壁面の仕上げを見ると、上から下まで同じではなく、3 つの異なる仕上げとなっています。ここからは、有名なフィレンツェのパラッツォ・メディチに始まるパラッツォのデザインを連想されます。

このように、ここでは、古典主義のデザインモチーフを、数多く組み合わせられ、その様式を非常によく学んだことが伺われるわけですが、とはいえ、妻木のデザインは西洋の模倣だけではないことは、ディテールを見るとわかります。それがみられるのが、コリント柱頭です。標準的なものと比較してみたいので、こちらに非常に流布したヴィニョーラのデザインと比べてみると、横浜正金のものの主要な特徴は、「葉の構成では、2 段目の葉がとても低い」こと「葉の形が特殊」であることが指摘できます。ご参考までに、古代ローマからバロックまでの代表的なコリントをならべました。コリントの柱頭は、世界に非常に多いので、これだけとくらべて何かいえるわけではないですが、横浜正金のものにみられる特徴とかクセのようなものは、すこし見えてくるかと思います。ちなみに、こちらは、横浜の他のコリント柱頭ですが、妻木のようなオリジナルのユニークなものは、ありません。

妻木がデザインするにあたって、参照した可能性のある資料として、現在、建築学会図書館にある妻木文庫、妻木の蔵書よりいくつかごらんいただきますと、まず、左は、アテネのゼウスオリンピオス神殿のものですが、2 番目の葉が比較的低いもので、ただいずれにしても、妻木のものは、渦巻きの結節点より低いので、やはりこれよりもっと低いです。葉の形も、似ているものとしては、こちらのようなものがありましたが、ただし、横浜正金銀行の場合は、表現としてだけでなく、技術的な意味、つまり細かく彫るのが難しかった、ということも事情も考えなければならないと思います。8 年前に建てられた日本銀行本店本館では、葉がこまかく彫られていないコリント式柱頭が作られていますが、その施工は当時の技術では困難を極めたということが指摘されています。それに対して、横浜正金銀行は、それより少し時代が下るので、この程度は葉の形が彫れたとはいえ、あまり細かくはできなかったということもあったかもしれません。

次に、2 階窓にはイオニア柱頭がありますが、今日はくわしくは見ませんが、こちらにも妻木のオリジナルのデザインがあります。

さて、現在、正面ファサードには、コリントとイオニアはあるけれど、ドリスはありません。ただ、こちらの当初の写真を見ると、正面玄関にはドリスの柱が立っていたことが確認できます。写真で見づらい

ですが、ドリスに特有のトリグリフという装飾がはっきり見えます。この建物は関東大震災で正面玄関が被害を受け、ドリスの柱までは復元されなかったわけですが、当初のデザインでは、ドリス、イオニア、コリントの３つの主要オーダーが、正面玄関側にそろっていたことになります。

古典主義の３つの主要オーダーを、一つの建築に用いた例として、非常に有名なのがローマのコロッセウムですが、そこでは 1 階にドリス、2 階にイオニア、3 階にコリントを用いられ、この構成は、その後非常に多くの建築で模範として参照されてきました。一方、横浜正金銀行のデザインは、それと全く同じではないですが、柱頭の位置だけを見れば、下から順に、ドリス、イオニア、コリントで、同じ順番になっています。

以上をまとめると、まず一つ目は、この建築は、古典主義のオーソドックスなデザイン要素、デザインモチーフを、かなり多く用いていて、明治の日本人が、西洋のスタイルを非常によく学んだ学習の集大成のように見えるということ、2 点目に、しかし、西洋の模倣だけでなく、妻木のオリジナルのデザインもディテールには見られるということ、3 点目に、現在は失われているけれど、当初の設計には、正面ファサードで３つのオーダーが揃っていたということです。特に、横浜正金銀行の当初ファサードで、この３つのオーダーが揃っていたことは、これまで指摘されてこなかったと思うのですが、妻木の設計において重要なことではないかと考えています。

３．英国総領事館（横浜開港資料館）

次に、旧英国領事館の建築をみたいと思います。これはイギリス工務省の設計で、全体はイギリスの 18 世紀の邸宅のスタイルです。古典主義のデザインとしては、長手方向の入口には、コリント式の円柱が 2 本建っています。

この正面玄関では、扉口が少し奥まっているため、上のアーチがトンネル状の天井となって奥まで続いていて、このように見上げたところからは、古代ローマの凱旋門が思い起こされます。この建築で凱旋門を思い起こさせるデザインは、もう一つあります。この建物には、コーニスという水平のラインが 2 段あり、かつ、最上部ではなく 2 番目がより突出しています。それも凱旋門を思い起こさせられるものです。その間隔の比例を計算してみると、このような結果になりました。

ところで、この建物が建つ敷地は、ペリーが上陸したところに近い場所であり、日本に外国文化が入ってきた象徴的な場所です。また、すぐ目の前には大桟橋がありますが、船旅の時代にはそこが日本の玄関口でした。そのような場所に、門を連想させるデザインが建つことは、合ってはいますが、その門のモチーフが、もともと古代ローマに戦勝を記念して建てられた「凱旋門」だ、ということからは、やはり複雑な気分にさせられます。ちなみに、英国工務省の設計ではないですが、インドには本当に凱旋門をモチーフとしていることが明らかな門が、イギリス人によって建てられています。

実は、英国領事館も、現在は、前面に新館が建てられて海は見えませんが、ちょうど同じように海に正対しています。新館が建つ前の古い白黒写真を見るとわかりやすいですが、これが非常に巧妙だと思うの

は、その天井は、遠くからは見えないし、建築の立面図では見えないことで、この建物は、遠くから見たら、あくまでも住宅風であり、あからさまに凱旋門風ではないので、凱旋門のモチーフがあることは玄関の下まで来てみないとわからないことです。そのため、それが隠されたデザインであるかのようにも見えます。そして、この白黒写真にみられるように、そういう建物が、この開港のシンボルである玉楠の木の、ちょうど目の前に建っているわけです。

４．まとめ

以上、横浜にある、二つの古典主義様式の建築についてご紹介しました。開港以来、古典主義の建築が日本にも入ってきたわけですが、そのデザインは、一見するとどれも似通っていますが、そこからどのように土地柄や、設計者の個性を読み取ることができるだろうかという視点で、横浜の近代建築をみてきました。

本日ご紹介した、二つの建物ですが、横浜正金銀行では、最初期の日本人建築家による、力の入った作品で、西洋の様式の学びの集大成のようなものであり、また同時に、自ら新しいデザインをしようという意欲も伺えるものでした。もう一つ、英国領事館では、全体としては邸宅風のデザインですが、そこに凱旋門を暗示させるデザインが隠されているようにも見え、この場所の意味とあわせて考えると、興味深いものです。

また、このことを別の言い方で言うと、現在の横浜の町は、一見、どこも同じような普通の町並みになっていますが、かつては、日本人町や居留地といった性格を異にする場所があり、そのことは、現在残されている、このような古典主義建築の意匠からも、読み取ることはできるのではないかと考えられます。